



**木田市長の**

ど〜んと

真珠のように輝く  
まちづくりのために

**コミュニケーション**

vol.78

ふたつの話題

コラムの執筆、ときどき悩みます。月にたった一回のことではありますが、題材をどうしようか、こんな内容のことを書いても良いのかな、発行は半月後なので旬をずれてしまうかな・・・。

しかし、今回は珍しく、書きたいことが二つあって悩みました。そこで思い切って、それぞれが少々短くなりますが、二つとも書くことにしました。

一つは、これまでも鳥羽青年会議所や、鳥羽市社会福祉協議会のみなさんをはじめとするたくさんのかたがたが被災地支援活動を行っていただいております。今回は、市民団体「わの会」が3月にチャリティコンサートを開いて、5月にはその収益金を活用して岩手県大槌町から被災

した親子らを招待したニュースです。鳥羽を訪れた一行からは感謝の寄せ書きが届いたことも伝えられました。あの震災で打ちのめされた心も、鳥羽の人たちの優しさや思いやりによって少しは癒されたのではないのでしょうか。

実行委員長の藤本真理子さんたちは毎年、文化祭などで中心のながんぼっておられます。その得意分野である文化力を活用して、チャリティコンサートを開いたときには、わたしもなるほどと感心させられました。鳥羽に来ていただいた大槌町のみなさんからは、大槌町だけでなく東北の広い地域に情報が発信されていることと思います。

二つ目は、答志町を舞台に「ヤアになる日」というドラマがNHKで制作され、9月

30日に放送されることになったというニュースです。先日、NHK津放送局長さんたちが市長室にも来られました。

出演は倉科カナさんや近藤正臣さん、脚本は、「答志島は生涯忘れることのできない島になりました」と言われている戸田山雅司さんです。その出来栄えがとても期待されるところです。津放送局にとって第一作目となるドラマとのことです。長年NHKのみなさんが答志島のさまざまなことについて取材をし、放送を続けていただいていたことが実を結んだと思います。

このドラマのきっかけとなった人は、花嫁事業で大阪から島へ嫁いできて、島の旅社のメンバーとして積極的に活躍されてきた和具の山本加奈子さんです。島の文化を守り続けてきた島民のかたがた、エコツアーの取り組みによりサントリー地域文化賞を受けた島の旅社の日々の努力などが間接的にこのドラマの制作に結びついたと思います。

市民みんなでこのドラマを楽しみ、市外からは多くの人たちが島を訪れてくれるようになれば素晴らしいと思います。

改めて「絆」を考える

今年2月の映画「ALWAYS 三丁目の夕日64」が上映されていきました。昭和30年代を時代背景としたシリーズ映画であり、今回の第3作目は東京五輪が開催された昭和39年の東京が舞台となっています。

東京五輪は、東海道新幹線の開通や名神高速道路の全線開通など、戦後日本のめざましい復興・発展を世界にアピールする絶好の機会となり、日本が世界へ進出し、将来に夢と希望をもって前進した最大のスポーツの祭典でした。

この映画には、古き良き日本の姿と共に、東京下町の人情が登場人物を通して描かれています。また、東日本大震災以降から声高に叫ばれている人々の「絆」が心豊かに描かれています。それは家族の「絆」であり、ご近所の小共同体での「絆」であったりします。現在、韓国や中国でも家族や小共同体での「絆」が描かれた映画やドラマがはやっていとも聞きます。それはいずれの国でも、もはや家族すら解体・崩壊しつつあるからとも言います。

毎日のテレビニュースからは、思いも寄らない事件・事故が飛び込んできます。繰り返される都市部における孤独死の問題や集団登校児童の列に突っ込む暴走車の悲惨極まりない事故は心を痛めます。

このような事件・事故の後には、必ず防止・解決策が議論されていますが、現代日本が抱える現実により切れない感を感じます。映画「ALWAYS 三丁目の夕日」に描かれている家族や隣近所の「絆」・「つながり」が大事にされたあの時代を取り戻すことはできないでしょうか。5月に開業した東京スカイツリーに、日本の未来への果てしない夢と希望を託したいと思えます。

改めて「絆」を考える

今年2月の映画「ALWAYS 三丁目の夕日64」が上映されていきました。昭和30年代を時代背景としたシリーズ映画であり、今回の第3作目は東京五輪が開催された昭和39年の東京が舞台となっています。

東京五輪は、東海道新幹線の開通や名神高速道路の全線開通など、戦後日本のめざましい復興・発展を世界にアピールする絶好の機会となり、日本が世界へ進出し、将来に夢と希望をもって前進した最大のスポーツの祭典でした。

この映画には、古き良き日本の姿と共に、東京下町の人情が登場人物を通して描かれています。また、東日本大震災以降から声高に叫ばれている人々の「絆」が心豊かに描かれています。それは家族の「絆」であり、ご近所の小共同体での「絆」であったりします。現在、韓国や中国でも家族や小共同体での「絆」が描かれた映画やドラマがはやっていとも聞きます。それはいずれの国でも、もはや家族すら解体・崩壊しつつあるからとも言います。

毎日のテレビニュースからは、思いも寄らない事件・事故が飛び込んできます。繰り返される都市部における孤独死の問題や集団登校児童の列に突っ込む暴走車の悲惨極まりない事故は心を痛めます。

このような事件・事故の後には、必ず防止・解決策が議論されていますが、現代日本が抱える現実により切れない感を感じます。映画「ALWAYS 三丁目の夕日」に描かれている家族や隣近所の「絆」・「つながり」が大事にされたあの時代を取り戻すことはできないでしょうか。5月に開業した東京スカイツリーに、日本の未来への果てしない夢と希望を託したいと思えます。